香川大学教育学部 附属教育実践総合センターニュース

No. 40　　平成 26 年 9 月 30 日発行

目　次

特集　平成 26 年度
附属教育実践総合センター事業について　1
平成 26 年度 附属教育実践総合センター事業計画　2
研究プロジェクト　1. 平成 25 年度実施報告　3-4
2. 平成 26 年度概要(計画)　4-5
第 1 期(4～7 月) 教育実践集中講座 実践報告　5
附属坂出中学校 教育研究発表会　報告　6
学部教員と附属坂出小学校教員との合同研究集会 報告　7
退任のご挨拶　7- 9
着任のご挨拶　9-11
附属教育実践総合センター 活動報告　12
寄贈図書　12-13
教育実践総合研究第 30 号 原稿募集　14

特 集　平成 26 年度　附属教育実践総合センター事業について

センター長　七條　正典

OLIVE SQUARE(本年 5 月 open)と紅葉

平成 26 年度の第 1 回管理委員会が 7 月 4 日(金)に開かれ、平成 26 年度の予算案ならびにセンター事業計画等が承認されました。センター事業の内容はほぼ例年通りですが、その主要な柱である研究プロジェクトについては、昨年度に引き続き「教育実習を軸とした 4 カ年を見通した実地教育プログラムの改善に関する研究プロジェクト」と「教職を目指す学生への支援体制の構築に関する研究プロジェクト」の二本を掲げています。これらのプロジェクトは、平成 27 年 4 月を目途に、実践的指導力を備えた教員養成の充実と、教員採用率の向上を視野に教職支援体制の向上を図るためのセンター改革のプロセスの一環として位置づけております。現在、学部及び附属学校園の先生方と、香川県教育センターの先生方と連携・協力のもと、昨年度検討し修正したプログラムに即して全面施行を行っております。一層充実した教員養成につながるよう取り組んでいるところです。

また、本年度から、客員教授が 3 名体制となりました。高松市総合教育センター研修指導員の松井保先生には昨年度に引き続き担当していただきます。そして、高松市立栗林小学校前校長の藤本泰雄先生と香川県教育委員会事務局義務教育課主任指導主事の山内秀則先生には、新たに教育実践講座等を担当していただくことになりました。すでに、4 月～6 月には、第 1 回教育実践集中講座を担当していただき、教育法規、学校経営、学級経営、生徒指導等、具体的事例を取り上げながら学生に対してわかりやすいご指導をいただきました。また、教員採用を前にした 4 年生に、模擬面接や模擬授業等、具体的で実践的なご指導をいただきました。

さらには、本年度の公開講演会は 3 回の開催を予定しておりましたが、8 月 9 日に開催を予定しておりました第 1 回公開講演会は、台風のためやむなく中止となりました。その後関係の先生方とも相談し、第 3 回公開講演会・研究交流会として開催することとなりました（平成 27 年 2 月 7 日(土)）。あらためて開催案内を送らせていただきます。いずれも教育委員会や学校現場・大学の研究機関等との連携を図りながら、学校を中心とした教育関係者に役立つ公開講演会となるよう、企画運営に取り組んで参りたいと存じます。

これら本センターの事業においては、本年度もこれまで以上に、香川県教育委員会や香川県教育センター及び附属学校園との連携・協力による研究の推進に努めて参りたいと考えております。どうか本年度もセンター事業の運営・推進にご支援・ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

平成 26 年度 附属教育実践総合センター 事業計画

Ⅰ　研究プロジェクト

「教育実習を軸とした４カ年を見通した実地教育プログラムの改善に関する研究プロジェクト」
「教職を目指す学生への支援体制の構築に関する研究プロジェクト」

Ⅱ　指導プロジェクト

１．教員養成
（１）「教職概論」
「教育実践基礎演習（フレンドシップ事業)」
「教育実践プレ演習」
「教育実践演習」
「教職実践演習」
（２）教育実践集中講座
２．教員研修
教員研修に資する研究会の開催及び研修会における指導・助言等
３．教育相談
（１）教師のための相談活動（学習指導、生徒指導等）
（２）教育相談活動
（３）教職志望学生に対する学内相談体制の整備
４．共通教育・学部・大学院関連授業科目及び卒論・修論指導

Ⅲ　教材・資料の収集・管理・活用支援

１．研究資料（他大学からの研究紀要等及び教育委員会関連出版物）等の収集・管理
２．教材、機器等の共同利用のための物品などの整備
３．特殊装置の有効利用のための整備
４．学習コンテンツの開発・収集
５．情報メディア・ＩＣＴ機器の活用に向けた教員養成・研修の支援
６．デジタル教科書等の活用のための整備

Ⅳ　研究活動の報告等

１．「香川大学教育実践総合研究」の編集
２．教育実践集中講座資料集の発行
３．フレンドシップ事業実施報告書の発行

Ⅴ　広報活動

１．インターネットのサイト（ホームページ）の更新・管理
２．センターニュース（年２回）
３．教師教育用映像情報のＶＯＤ閲覧・貸出に向けた整備
４．パンフレットの改訂・発行等

Ⅵ　講演会・研究会等の開催

１．公開講演会
２．研究交流会
３．その他（卒業前直前対策実践講座）

Ⅶ　関係機関との連携

１．研究プロジェクト・指導プロジェクトに関わる関係機関との連携
２．その他　地域の各機関との連携
（１）香川県教育委員会
（２）香川県教育センター
（３）高松市総合教育センター　等

研究プロジェクト

１．平成２５年度　実施報告

【研究プロジェクト１】

教育実習を軸とした４カ年を見通した実地教育プログラムの改善に関する研究プロジェクト

平成 25 年度より、研究プロジェクトの一つとして、「教育実習を軸とした４カ年を見通した実地教育プログラムの改善に関する研究プロジェクト」が企画推進されました。

教員養成において、実践的指導力の育成が求められている状況を背景に、これまでのセンター研究プロジェクトでは、平成 21・22 年度には「教育実習を中心とした学部と附属学校園との連携による支援の在り方に関する研究プロジェクト」を、平成 23・24 年度には「教職実践演習プログラムの開発と実施に関する研究プロジェクト」を立ち上げ、それらを通して、教職を目指す学生に対しての実践的指導力の向上を目指した研究を進めてきました。それらを基盤として、学部１年次から４年次までのこれまでの実地教育の内容や指導体制の在り方を再点検し、教職を目指す学生にとってより有効性のある実地教育プログラムの改善に関する研究を推進することになりました。

第１回会合では、まず、本研究プロジェクトの設定趣旨について共通理解を図りました。学部教育で行われている「実地教育」の現状と課題について、それぞれの学部担当者から報告がなされ、質疑を通しながら現状理解を深めました（「実地教育」として、大学入門ゼミ、教職概論、教育実践プレ演習、教育実践基礎演習（フレンドシップ）、介護実践演習、ボランティア活動、教育実践演習（教育実習事前事後指導）、教育実践演習、からの報告がありました。）

第２回会合では、学部における実地教育の全体像が見えにくいとの指摘を踏まえ、資料「４ヵ年を見通した実地教育改善に関する全体構想（案）」が作成・提示され、それに基づき、本研究プロジェクトの目的を再確認しました。その後、実地教育科目の改善についての第１次案が示され、検討がなされました。第３回会合では、前回の議論を踏まえたかたちで改善案が修正され、第２次案が示されました。再度検討を行い、26 年度の改善実施に向けてよりつめていくことになりました。

25 年度の成果としては、附属学校園の先生方に、学部の実地教育の現状を理解いただけたことがあげられます。実地教育全体のそれぞれの科目の中に、学部がいかに質の高い教育内容を含み込めるのかがポイントになります。また、それを実施していくためには、学部と附属学校園との協働がより重要になることが示されたように思われます。

＜参考＞ 平成 25 年度 研究プロジェクト１の体制・会合について（概要）

○参加者：学部教員、附属学校園教員、香川県教育センターの先生方、計 24 名
○会　合：全３回実施

第１回　平成 25 年７月 25 日（木）
・研究プロジェクトの設定趣旨について
・研究プロジェクトの進め方について
・実地教育の現状と課題について

第２回　平成 25 年 10 月 17 日（木）
・実地教育科目の改善について
・研究プロジェクトの進め方について

第３回　平成 25 年 11 月 28 日（木）
・実地教育科目の改善案について
・今後の研究プロジェクトの進め方について

（「研究プロジェクト１」文責：山岸知幸）

【研究プロジェクト２】

教職を目指す学生への支援体制の構築に関する研究プロジェクト

教員養成をより充実したものにするためには、研究プロジェクト１についての実践的指導力の向上を目指した指導内容・指導体制づくりとともに、教職への志望動機を高め、教員採用率の向上にも資する具体的な支援体制が必要と考えています。そこで、研究プロジェクト１を踏まえながら、教職を目指す学生たちへの支援体制の構築に向けた研究を平成 25 年度より開始しました。まず、教職支援の内容として、教職への志望動機を高める対応、教職に関する悩みへの対応、教員採用試験に関する対応の３つに力点をおくこととしました。次に、教職支援に関して、本学部で既に行われている事柄を整理しました。そして、先行研究と照らし合わせ、次年度の試行内容について検討しました。

＜参考＞ 平成 25 年度 研究プロジェクト２の体制・会合について（概要）

○参加者：学部教員、附属学校園教員、香川県教育センターの先生　計 21 名
○会　合：全３回実施

第１回　平成 25 年６月 27 日（木）
・教職支援の内容について
・本学部で既に行われている教職支援について

第２回　平成 25 年 10 月 31 日（木）
・教職支援に関する先行研究（本学部に関するものを含む）について

第３回　平成 25 年 12 月 19 日（木）
・次年度の教職支援（試行）について

（「研究プロジェクト２」文責：宮前義和）

２．平成２６年度　概要（計画）

【研究プロジェクト１】

教育実習を軸とした４カ年を見通した実地教育プログラムの改善に関する研究プロジェクト

平成 26 年度は、予定通り、昨年度検討し修正したプログラムを試行することになります。実施－改善を進め、27 年度からの新実地教育プログラムのスタートを目指すことになります。なお、会合は３回を予定しており、すでに２回を終了しております。

第１回会合では、昨年度の研究プロジェクトの総括後、実地教育の改善実施についての全体説明がなされました。とりわけ、２年次の教育実践プレ演習及び３年次の教育実践演習（教育実習事前指導）の内容や指導体制の改善実施に焦点が当てられ、検討が行われました。

第２回会合では、すでに実施された教育実習事前指導について報告がなされるとともに、各附属学校園より、本年度の事前指導を通して見出された事前指導の課題について報告をいただきました。また、『教育実習必携』について意見交流を行い、なんらかのかたちで修正していく必要性を共通認識するに至りました。ポイントを押さえたシンプルなかたちで、学生の利便性を考慮したものへの改訂を今後の課題として捉えました。

次回の会合では、本年度の改善実施の検討を行うとともに、27 年度へ向けた改善プログラムの策定を目指していく予定です。

＜参考＞ 平成 26 年度 研究プロジェクト１の体制・会合について（概要）

○参加者：学部教員、附属学校園教員、香川県教育センターの先生方、計 22 名
○会　合：全３回実施予定

第１回　平成 26 年５月 29 日（木）
・平成 25 年度の研究プロジェクトの総括について（確認）
・実地教育の改善実施について
・今後の研究プロジェクトの進め方について

第２回　平成 26 年７月 24 日（木）
・教育実習事前指導の改善について
・『教育実習必携』の改訂について
・今後の研究プロジェクトの進め方について
・その他（他プログラムの実施状況等）

第３回　平成 26 年 11 月 27 日（木）【予定】

（「研究プロジェクト１」文責：山岸知幸）

【研究プロジェクト２】

教職を目指す学生への支援体制の構築に関する研究プロジェクト

平成 25 年度の研究プロジェクトの検討結果を踏まえ、平成 26 年度は教職支援に関する試行を行います。試行を行うにあたって、３種類の教職支援のタイプを考えました。「日常型教職支援」とは、クラス（１年次）、ゼミ、講義等において日常行われている教職支援です。「参加型教職支援」とは、例えば教職自主サークルのような、学生自らの希望で参加する各種のガイダンス、セミナー、説明会等に関する教職支援です。「活用型教職支援」とは、教員採用試験に関する相談等、個々に行われる教職支援です。試行の具体的内容として、「活用型教職支援」を引き続き実施しながら来談件数を数えること、卒業生・修了生と学部生が交流できる場として研究交流会を開催すること、教職支援に関する調査を学生に対して行うこと、本学部教員、学生に向けた教職支援に関するパンフレットを作成すること等があがっており、今後、実施していく予定です。

＜会合速報＞６月 26 日に第１回会合が行われました。まず、平成 25 年度の研究プロジェクトの検討結果が確認されました。次に、平成 26 年度に行われる教職支援（試行）内容を検討しました。最後に、本年度は、あと２回の会合を行うことになりました。

（「研究プロジェクト２」文責：宮前義和）

第１期（4～7 月）教育実践集中講座 実践報告

「教師になる」とはどういうことか？　～「先生」と呼ばれる日への第一歩～

附属教育実践総合センター客員教授　松井 保・藤本泰雄・山内秀則

第１期の集中講座では、「『教師になる』とはどういうことか？」と題して、次のような教育活動全般に関する基礎的な内容を中心に、法規や通知等を取り上げたり、演習を取り入れたりしながら学びを進めていきました。

［第１回］４月 24 日（木）教育法規・教育施策
「教師として生きる」（藤本）
［第２回］５月 15 日（木）学級経営
「学級で育つ子どもたちのために」（藤本）
［第３回］５月 24 日（土）教育法規
「教育目標と教師に求められる力」（松井）
「信頼される教師をめざして」（山内）
［第４回］５月 31 日（土）教育法規
「教育課程と学校評価」（松井）
「いじめ・不登校問題等への対応」（山内）
［第５回］６月５日（木）教職実践講座
「集団討論・個人面接への対応」（藤本）
［第６回］６月７日（土）教育法規
「『生きる力』の育成と学力」（松井）
「苦情等の対応と学警連携」（山内）
［第７回］６月 16 日（月）教職理解
「教職を知る　教職の魅力」（藤本）
［第８回］６月 18 日（水）子ども理解
「授業づくりと子ども理解」（山内）
［第９回］６月 23 日（月）生徒指導
「生徒理解を基盤とした生徒指導」（松井）
［第 10 回］６月 28 日（土）
「東日本大震災の被災地調査報告会」（藤本）
［第 11 回］７月 10 日（木）子ども理解
「場面指導（ロールプレイ）
ー学級担任になってやってみようー」（藤本）

教育基本法第９条には、「法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。」とあります。「崇高な」ということばが法律に使われることは稀なのだそうです。また、研究だけではだめで、修養に努め、人格を磨くことが定められており、現場の教員は日々、子どもの成長に責任をもち、研修に励んでおります。

他を思い自己を鍛えるような崇高さや自ら学び続け、鍛え続ける存在であり続けることの尊さが、教職にはあります。そのことを、教職を目指し、一歩踏み出そうとしている学生のみなさんに、ぜひ伝えていきたいと考え、授業を行ってまいりました。また、このような願いから、拙い経験の中から具体的なエピソードを交え、教職としてのやりがいや喜びも伝えてきました。しかし、伝えるということは、実に難しいことです。私たちの授業を通して、学生さんたちが、教職に就く未来の自分を思い描き、少しでも夢を膨らませてもらえれば、幸いです。

附属坂出中学校 教育研究発表会 報告

研究テーマ

「学ぶこと」と「生きること」の統合
－語り合う中で、自己の「ものがたり」をつむぐ－

香川大学教育学部 附属坂出中学校

１　研究会の概要

本校では、自立した学習者の育成をめざし、生涯にわたって学び続ける意欲やその基盤となる力の育成を中心に実践研究を継続してきました。今期は、ナラティヴ・アプローチとしての「語り」の研究を継続しつつ、研究の主眼を「学びの価値」の実感を重視した自己物語へと発展させ、生涯学習を視野に入れた「学ぶこと」と「生きること」の統合を具現化する具体的な指導方法やカリキュラム構想について提案しました。

去る６月 13 日の教育研究発表会では、県内外および教育関係機関等より 800 名を超える参会者をお迎えし、24 本の公開授業と研究協議会を中心に本校の研究実践をご覧いただくとともに、全国にその意義と歩みを発信することができました。研究の核となる「ものがたり」の授業とは、自己を形成し、自己実現を図る学びです。学んだことを語り直し、自己の学びの文脈の中で、学ぶことの価値を実感していきます。また、個々の生徒の得意、興味、学習スタイル等の特性を表す認知的個性を授業に取り入れ、より質の高い学びを実現させる提案も併せて行いました。

鼎談では、「新しい時代の＜意欲を育む＞授業づくり」のテーマのもと、松村暢隆先生（関西大学文学部教授）からは、認知的個性を学習に活かしていく「個性を活かす学び」について、秋田喜代美先生（東京大学大学院教育学研究科教授）からは、「ともに学び合うこと」についてお話しいただきました。今後も本校の研究を、自信をもって進めていける、大きな力を与えてくださいました。

また、秋田先生には「自己の物語をつむぐ授業」という演題でご講演いただきました。授業において具体的に教材、教室のコミュニケーション、授業の展開を考え、教師がいかにかかわり、学び合いを深めていくか、それぞれの学びの物語の保証に向けた授業づくりについて、本校や全国の中学校での実践の具体例をあげながら分かりやすくご提案いただきました。

【主体―主体関係の語り合い】

【認知的個性を活かした学び】

【秋田先生のご講演】

２　成果と課題

各研究協議会やアンケートでは、参観者の方々から本校の研究実践や生徒たちの学ぶ姿に多くの賛同の声が寄せられました。「ものがたり」を授業レベルで発信している研究は全国でも例がなく、大きな一歩を踏み出せたものと考えます。10 年先の教育の主流になるであろう本研究を継続し、深め、「ものがたり」の附坂中として今後も本校の研究実践を全国に発信していきたいと思います。

（文責：川田英之）

学部教員と附属坂出小学校教員との合同研究集会 報告

本年度の香川大学教員と附属坂出小学校教員との合同研究集会は、６月４日(水)に開催されました。

附属坂出小学校では、平成 15 年度より「思考力」に着目し、継続的な実践研究を進め、研究成果を蓄積してきています。昨年度は、「『思考力』を育成するユニバーサルデザインの授業づくり」（２年次）というテーマで、特別支援教育の知見を生かし、教材を捉えやすいものにし、児童の学び合いの活性化を図ることを通して、児童の思考活動の充実を目指してきました。本年度は、最新の「思考力」研究の動向も押さえつつ、より「学び合い」に焦点を当て、「自分の考えをもった者どうしの言語活動を中心とした関わり、対話のある授業」を追究していこうとしています。こうした課題意識から本年度のメイン研究テーマを、「対話を通した『思考力』の育成」としています。

研究集会当日は、第２学年西組の生活科「生きもの大すき」の授業が公開されました。本単元で育成したい「思考力」は、「生き物を飼育する活動の中で、これまでの失敗・成功体験を基にして、自分が飼育している生き物への関わり方を工夫する力」でした。そこへ向かう「対話」を、「同じ生き物を飼育している友達どうしでグループになり、さまざまな関わり方を話し合う」「数種類の生き物について、生き物に応じた関わり方を話し合い、関わり方の異同を捉える」という２つとして構想されていました。実際の授業場面では、学級の雰囲気を大切にした、児童の対話を促進するための授業が展開されました。

授業参観後の全体会では、本年度の研究についての説明及び授業討議（附坂小型リフレクション）が行われました。

本年度の研究の説明では、これまでの研究の経過・成果及び本年度の研究の方向性が示されました。本年度も育成したい思考力に照らしながら、多様な考えを生む教材・授業構成を工夫していくとともに、あらたに児童が主体的に互いの考えを関わらせていくための支援を、開発的カウンセリングを手がかりとして研究を進めていくという提起でした。

授業討議では、授業記録（個の見取りシートを含む）が配布され、それらも参考にしながら進められました。授業の導入、主発問からはじまり授業全体について、具体的な場面に沿いながら、代案も提示しながらの、例年以上の活発な討議になったように思います。

「対話」という概念は、教育学研究においては以前から着目されている重要な概念です。それゆえ先行研究も多く、レビューも必要になります。「対話」という概念にこだわることによって、「学び合いの活性化と思考活動の充実」を、授業の中での児童の姿として示していくことが重要になると思われました。白熱した討議が行われ、今後の研究の展開に大きな可能性を感じる合同研究集会となりました。　（文責：山岸知幸）

退任のご挨拶

■貴重な機会をいただき感謝申し上げます

香川県教育委員会事務局義務教育課　主任指導主事　石川恭広（前・実践センター 客員教授）

一年間、客員教授として、香川大学の多くの学生さんに対して学校教育に関する講話をしたり、やる気や不安など率直な思いを聞いたりすることができました。大学関係者の方々には、このような貴重な機会を与えていただき誠にありがとうございました。

力不足ではありますが、学生さんに「先生になりたい！」気持ちをより強くもってほしいという願いから、子どもたちとかかわる喜びや素晴らしさが少しでも伝わるよう努めてまいりました。教職の

道は、決して簡単なものではありませんが、その厳しさ以上に喜びがあります。学習指導や生徒指導の細かな技は後からついてくる。まずは子どもたちの健やかな成長を思う教師としての情熱が大切。授業後には何人かの学生さんが訪れ、教師になることの夢を語ってくれました。頼もしく感じました。教職へと踏み出していく多くの学生さんに、わずかでもかかわることができたことを本当に嬉しく思います。

現在、引き続き義務教育課に勤務しております。香川大学と県教育委員会との連携が進む中、関係の方々には今後もお世話になる機会が多々あると思います。どうぞよろしくお願いいたします。

■退任にあたって　　**野崎武司**（前・附属高松中学校 校長）

わずか２年間ではありましたが、附属高松中学校の校長として、至福の時間を過ごすことができました。様々に印象に残る子どもたち。小学校の頃から毎朝自分の弁当を手作りしてきたという男の子、学力も身体能力も高くかつピアノが弾け、書写も達筆な子どもたち。しかしその一方、様々なことができるのに自分に自信が持てないという子、ちょっとしたことでとり乱してしまう子。中学生は難しいなあ、と何度も感じました。その点、先生方はとても頼もしかった。子どもたちの少しの変化を敏感に感じ取り、先手、先手に対処していく姿勢、子どもとも保護者とも向き合ってしっかりコミュニケーションをとろうとする姿勢。彼らの授業実践・教育実践の背後には、こうした地道な取り組みがありました。

私は以前から附属学校と関係をもってきたつもりでした。しかし当たり前のことですが、校長として全く異なる附属学校を体験することができました。それは子どもたち、教師たち、保護者たちの素晴らしさであり、その最良の関係を紡ぎだそうとする人間としての英知のようなものだったと思います。改めて、私自身もっと頑張っていきたいと奮起の念を覚えております。感謝。

■５年間を振り返って　　**高松市立川東小学校 校長　末竹路弘**（前・附属高松中学校 副校長）

副校長として、５年間（平成 21 年度～平成 25 年度）、お世話になりました。その間を振り返ってみますと、教育研究では、平成 20 年度から平成 23 年度まで文部科学省の研究開発の指定を受け、総合教科「未来志向科」を中心とした教育課程の開発及びその先の研究の方向性を、研究同人として模索したことが印象に残っています。教育実習では、教員養成コア・カリキュラムづくりに参画したり、教育実習実施専門委員会でよりよい教育実習について話し合ったりしたことが思い出されます。施設・設備では、念願だった耐震及び大規模改修を平成 24 年度末に終え、生徒の学習環境の機能強化を図ることができました。地域貢献では、若年教員の研修を附属学校で行い、指導力の向上を図るシステムを構想する段階まで関わることができました。いずれの取組も関係者の深いご理解とご協力の賜であると深く感謝する次第です。今後共、大学、学部、附属学校の発展を期待しております。

■多くの出会いに感謝いたします　　**高松市立川島小学校 校長　滝川 稔**（前・附属高松小学校 副校長）

平成23年度から３カ年、附属高松小学校で勤める日が巡って参りました。先に８年間の勤務を経験しており、都合11年間、お世話になることになりました。

「子どもよし、おやよし、先生よし」文句の無い附属高松小での毎日。それでも、多くの方々に支えていただいたからこそ、全うできたものと感謝申し上げます。学部長様はじめ学部の関係の方々、ご後援の皆様には、経営上のご支援を数多くいただきました。

４月から公立校勤務になり、学部・附属、そして実践センターが中心となっての県教育界への様々なご尽力に、あらためて、感じ入ることがあります。多くの難局に当たり、その克服に力を注がれる姿は、大変貴重です。そして、一緒に研究や教員養成の取り組ませていただいた日々を大切に思います。

ぜひ、ますますのご活躍、ご発展をお祈り申し上げます。お世話になりました。

■幸せな４年間に感謝　　**宇多津町立宇多津北小学校 校長　宮野真也**（前・附属坂出小学校 副校長）

この４年間で強く感じたこと。①附属坂出小学校が 100 年の歴史の上に立つ素晴らしい学校であること。②その歴史を受け継ぐ子どもたちがこの上なく素直であり，ぐんぐん吸収してよくなろうという意欲に溢れていること。③その子どもたちのために誠心誠意応えようとする素敵な教員ばかりであること。そして④学部や先輩，松韻会の力強いバックアップがあること。

とりわけ，副校長としては教育学部や附属教育実践総合センターの先生方とご一緒する機会が多く，大学・学部のために献身的に努力されている姿に敬服しておりました。また，附属学校園を大事にしてくださっていることを肌で感じ，感謝の念でいっぱいでした。

お陰様で幸せな４年間でした。ありがとうございました。

■充実した日々でした　　**坂出市立松山小学校 教頭　佐藤美芽**（前・附属幼稚園 副園長）

６年間、副園長としてお世話になりました。以前に教諭として勤務していた７年間を合わせると13 年間になります。離任して半年が過ぎますが、今でも、県下の先進研究園・実習生を育てる園として、研究や討議を重ねながら、保育を充実させようと、職員皆と力を合わせながら切磋琢磨した日々を、懐かしくそして宝物のように思い出します。大学との先生方と一緒に合同研究をしたり、附属としての在り方について会議をしたりしたことも貴重な経験です。また、在園中は、耐震工事や 80 周年事業、園庭の芝生化などいろいろな出来事もありましたが、保護者の方々の惜しみないご協力もいただき、忙しいというよりは、楽しく有意義な思い出となっています。

こんなにもすばらしい経験をさせていただいことに、関係の皆様方に心より感謝申し上げます。そして、香川大学教育学部並びに附属学校のますますのご発展を心からお祈りしております。

■企画推進委員離任にあたっての追憶の日々　　**櫻井佳樹**（前・実践センター 企画推進委員）

私は、企画推進委員に２００５年に就任したため、９年間も在任したことになる。その間必要以上に議論をふっかけ、いたずらに会議を延ばし、その後は、酒宴の席へと流れていった。文字通りの古代ギリシャ発祥のシンポジウムを堪能できたのである。実践センターは、こうあるべきだという夢想を語ることは無責任に楽しかった。それは実践センターの皆さんの優しさと悪友たちによって可能となったものであり、同時に現実という壁に直面する苦悩の極みでもあった。

この度、附属高松中学校への着任を機会にセンターを遠くから見ることになった。理論と実践を繋ぐ思考様式をもたらしてくれたセンターで得たものを糧として、中学校という現場で実践して参ります、お父さん。９年間もの長い間、大変お世話になりました。ありがとうございました(涙)。

■感謝の心で前進していきます！

高松市立庵治小学校 教頭　大西えい子（前・実践センター 企画推進委員）

交流人事教員として、平成 22 年度から４年間、母校で勤務する機会をいただき、さらに４年目は附属教育実践総合センターの企画推進委員をさせていただき、心より感謝しております。温かく個性豊かで深みのある実践総合センターの先生方からは、教育の本質を問い続けること、教育活動に真摯に取り組むことなどを学ばせていただき、気持ちが引き締まりました。素直で前向きに取り組む学生たちには頼もしさを感じ、心から応援したいと思いました。現在の私の勤務校は、今年度からＮＩＥ実践指定校になり、新聞を教材として活用したり、新聞作りを行ったり、メディアリテラシーを学んだりすることに取り組んでいます。これからも後輩たちを応援し続け、私自身も学び続ける姿勢を大切にしていきます。ほんとうにありがとうございました。

■お世話になりました。　　**濱田敦子**（前・実践センター 事務補佐員）

本年３月、附属教育実践総合センターを退職いたしました。平成 21 年 11 月に着任してから約４年と４か月の間、私にとってとても充実した日々でした。

何かと行き届かぬことばかりで、ご迷惑をおかけすることも多々あったと思います。

実践総合センターに関わる先生方や学生さんから親しくお声をかけていただき、いろいろな興味深いお話を聞かせてもらい、楽しく勤務させていただくことができました。センターでの経験は、今の職場で大変活かされています。本当にありがとうございました。

着任のご挨拶

■子どもを温かく育む大人　　**実践センター 客員教授　藤本泰雄**

この度、附属教育実践総合センター客員教授を拝命しました。どうぞよろしくお願いいたします。昨年度末をもって高松市立栗林小学校を最後に定年退職し、公益財団法人香川県教育公務員弘済会の専務理事として学校の研究活動等を側面から支援する事業に携わっております。今回、こうして将来の日本の教育を担い、児童生徒の教育をつかさどる若者の指導に直接携われるということは、この上ない幸福であります。

現在は、より多くの即戦力としての教員が求められる時代であります。しかし私は、学生の皆さんには、教育について学ぶことは、教職に就くための資質向上だけではなく、よりよい親として、地域住民として、そして大人として、子どもを温かく育むことができるような素養を身につけることであるということを基本姿勢として務めたいと思っています。そうすることが、子どもを中心とした豊かな社会を生み出し、自分自身も幸福になれると考えています。

■教職の使命と魅力を伝えます　　**実践センター 客員教授　山内秀則**

この度、平成 26 年４月１日付けで、香川大学客員教授としてお世話になることになりました。私は、平成 17 年度～24 年度の８年間の附属坂出小学校在籍の後、現在は香川県教育委員会義務教育課に勤務しており、兼務という形になります。

教育学部の学生さんの中には、附属坂出小学校で関わった子どもたちもいて、嬉しい再会となっております。また、90 分間という長さに不安を感じておりましたが、七條先生をはじめ大学の先生方や実践総合センターのスタッフの方々に支えていただき、何とか前期を終えることができました。このような勉強の機会を与えていただき、心から感謝しております。

これまで教育実習生と関わってきた経験を生かし、微力ながらも、教職の崇高な使命や魅力を学生の皆さんに伝えていきたいと考えておりますので、今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

■中学生という山を登る日々　　**附属高松中学校 校長　櫻井佳樹**

平成 26 年４月１日付で、附属高松中学校長に着任しました。中学校の現場を見ることも初めてならば、校長として振る舞うことも初めてであり、おそらく多くの失笑を買って参りましたが、教職員や保護者、卒業生、OB の先生方など附属応援団の皆様のおかげで、大過なく職務を全うできています。中学生という思春期真っ盛りの子どもたちは、そう素直に自分の気持ちを表現してくれるわけではありません。しかし、彼らとの距離を詰めていくルートがないわけではありません。そうした作業は､難攻不落の山を制覇するためのルート探索にも似ており、そうした瞬間は大きな喜びを感じる瞬間です。そのためには、若干の冒険心が必要ですが､忍耐心も必要です。大人ぶっても中身はまだまだ子どもである中学生と関わりながら、彼らの成長に微力ながら寄与したいと考えています。

■教員の授業力向上　　**附属高松中学校 副校長　赤熊俊二**

この度、香川大学教育学部附属高松中学校の副校長として勤務することになりました。どうぞよろしくお願いいたします。平成５～14 年度の９年間、同校で教諭としてお世話になりました。その間、理科を中心とした教育実習生とかかわり、今、多くの者が教員として活躍してくれています。中には香川大学職員として附属学校に勤務する者も出てきています。心から嬉しく感じるとともに誇りに思っています。

さて、大量採用時代の到来、全国学力・学習状況調査結果の低迷など香川大学のミッションの再定義である地域連携事業の強化における附属学校の存在意義が問われています。特に大学生や若い教員の授業力向上に附属学校が果たす役割は大きくなっていると感じています。教員の授業力向上に、香川大学と連携し、一層力を入れていきたいと考えています。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

■分かち合える学校に　　**附属高松小学校 副校長　米村博司**

この度、高松市立高松第一小学校より過日、着任いたしました。７年ぶりの附属高松小学校ですが、人なつっこく元気一杯の子どもたちを見ていると、今も変わらず大学の先生方や、附高小を心から愛する多くの方々にしっかりと見守られ、支えられていることを実感いたしました。

さて、附属高松小学校は、今年度、文部科学省研究開発指定校として２年目の年です。外国語科を含めた「教科学習」と、道徳・特別活動・総合的な学習の時間を統合した「創造活動」との往還的な２領域カリキュラムで、豊かな人間性や創造性が育めるよう研究を進めているところです。

研究テーマは、『分かち合い共に未来を創造する子どもの育成　～２領域カリキュラムで見方・考え方を育む指導と評価の在り方～』です。子どもたちと共に、我々教職員も、喜びや悲しみ、思いや願い等をしっかりと分かち合いながら、輝かしい未来を創造する子どもたちのために全力で取り組んで参りたいと存じます。今後とも引き続き皆様方のご指導・ご支援がいただけるとありがたいです。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

■４度目のご縁に感謝して　　**附属坂出小学校 副校長　樽本導和**

これまで、附属坂出小学校では小学生として、教育実習生として、教員としてお世話になってきました。この度、再び母校で勤務できることになり決意を新たにしております。

時が経っても附属には受け継がれている伝統があります。１つ目は、公立学校の教育へ活かせる先導的な教育研究です。これから増える若年層の教員にもわかりやすく、実践してみたいと思えるような授業公開を心がけます。２つ目は、即戦力として活躍できる教員の養成です。附属での教育実習で、

志を高くかつ少々のことではへこたれないたくましい教員を育てます。３つ目は、附属勤務にやりがいを感じ、切磋琢磨し自分を成長させていく教員文化です。一人一人の教員のよさを引き出しチームで取り組めるよう支援していきます。

本校児童玄関に掲げられている銅文「歴史をおもい、歴史にこたえよ」を胸に刻み、附属坂出小学校の発展に少しでも貢献できるよう微力を尽くしたいと思っております。ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

■心と学びをつなぐ道　　**附属幼稚園 副園長　倉野晴代**

平成７年から８年間、附属幼稚園で、いろいろな出会いがあり、心を揺り動かされる貴重な体験をさせていただきました。子どものひたむきな姿から「生きること」について、感じ学ぶことが多々ありました。また保護者の方々の温かなご支援のもと、一緒に育ちの喜びを実感できるすばらしさも味わえた日々でした。大学の先生方との事例研究では、新たな視点や自己理解への目を与えられ、学び続ける気持ちを高めることができました。

この春より、小学校勤務の後、再び幼稚園でお世話になります。子どもたちと心を向き合わせる幼稚園職員の温かさ、エネルギーの豊富さを力に共に一歩一歩進んでいくことへの思いがふくらんでいます。附属園を支えてくださる保護者の方々の熱い思いも日々伝わってきて、共にあること、心のつながりを大切に生かしていきたいと強く思っています。子ども、保育者、保護者が互いに育ち合っていける保育実践・研究に心より取り組んでいきたいと考えています。附属園ならではの協力・つながりを十分に発揮できますように、今後もどうぞよろしくお願い致します。

■附属教育実践総合センターならではの取り組みを、一歩ずつ

実践センター 企画推進委員　松本博雄

このところ、教育を取り巻く言説と向き合っていて気になるのは、「……力の低下」など、ネガティブな語り口が思った以上に多いということです。もちろん、根拠のない楽観は戒めるべきですが、メディア等を介して登場するネガティブなムードに振り回されすぎず、学術的に確かめられた手立てを事実に基づき地道に積み重ねていく、さらにはそれを、実践の場で活躍されている先生方の手応えと共鳴できるよう結びつけていくという意味で、教育実践総合センター、そして大学の果たすべき役割はますます大きくなっているように思います。

ヒトがヒトから学び、力を合わせてきた歴史は、教育や国家の制度よりも、ずっと古くから続いているものです。子どもたちと、それを支える大人たちの明日、そしてあさってが豊かなものになるよう、私も実践センターの活動に関わる先生方から多くを学びつつ、微力ながら取り組んでまいりたいと存じます。よろしくお願いいたします。

■より実践的な力を身に付けるために　　**実践センター 企画推進委員　池西郁広**

人事交流教員として３年目を迎えました。したがって今年度、教員採用選考試験を受験し来年度から教員になろうとしている学生との関わりは２年生からです。赴任後まず、教育実践総合センターのフレンドシップ事業に関わらせていただき、これから教員になろうとしている学生のエネルギーをいっぱい感じました。また、赴任１年目より、教育実践総合センターの様々な事業に関わらせていただき、実践的な学びを重視している教育実践総合センターの役割の重要性を認識しました。今回、企画推進委員となり、26 年度はもちろんのこと、27 年度の改革に向けて、より実践的な学び全体を考える一員となれたことを大変うれしく思うとともに大変さも感じております。限られた期間ではありますが、与えられた役割が少しでも果たせるよう力の限り努力していきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

■よろしくお願いいたします。　　**実践センター 事務補佐員　濱田雅子**

平成 26 年４月１日より附属教育実践総合センターの事務補佐員として採用されました、濱田雅子と申します。大学のことは何も分からず至らぬところばかりで反省と勉強の毎日ですが、いろいろ経験できることが楽しく、本当にありがたく感じております。

精一杯がんばってまいります。ご指導いただきますよう、よろしくお願いいたします。

附属教育実践総合センター 活動報告（2014/04～09）

４月 ９日（水）　第一回 フレンドシップ事業実施専門委員会
４月 10 日（木）　教育実践演習 第一回全体指導
４月 16 日（水）　フレンドシップ事業 オリエンテーション
　　特別支援教育実践演習全体指導
４月 17 日（木）　教育実践演習 第二回全体指導
４月 22 日（火）　第一回 専任会議
４月 24 日（木）　教育実践演習 第三回全体指導
　　教育実践集中講座（第一期１回目）
５月 ８日（木）　教育実践演習 第四回全体指導
５月 ９日（金）　第一回 企画推進委員会
５月 15 日（木）　教育実践集中講座（第一期２回目）
５月 20 日（火）　第二回 専任会議
５月 21 日（水）　フレンドシップ事業 事前研修
５月 22 日（木）　教育実践演習 第五回全体指導
５月 24 日（土）　教育実践集中講座（第一期３回目）
５月 24 日（土）～25 日（日）　フレンドシップ事業野外教育体験活動(五色台少年自然センター)
５月 28 日（水）　教育実践プレ演習 第一回全体指導
５月 29 日（木）　第一回 研究プロジェクト①会合
５月 31 日（土）　教育実践集中講座（第一期４回目）
６月 ５日（木）　教育実践集中講座（第一期５回目）
６月 ７日（土）　教育実践集中講座（第一期６回目）
６月 11 日（水）　第一回 編集会議
６月 16 日（月）　教育実践集中講座（第一期７回目）
６月 17 日（火）　第三回 専任会議
６月 18 日（水）　教育実践プレ演習 第二回全体指導
　　教育実践集中講座（第一期８回目）
６月 23 日（月）　教育実践集中講座（第一期９回目）
６月 26 日（木）　第一回 研究プロジェクト②会合
６月 28 日（土）　教育実践集中講座（第一期 10 回目）
６月 30 日（月）　第二回 編集会議
７月 １日（火）～２日（水）フレンドシップ事業 野外教育体験活動(屋島少年自然の家:附坂小)
７月 ４日（金）　第一回 管理委員会
７月 ９日（水）　第二回 フレンドシップ事業実施専門委員会
７月 10 日（木）　教育実践集中講座（第一期 11 回目）
７月 22 日（火）　第四回 専任会議
７月 23 日（水）　フレンドシップ事業 野外教育体験活動（シンポジウム）
７月 24 日（木）　第二回 研究プロジェクト①会合
　　教育実践演習 第三回全体指導
７月 30 日（水）　教育実践プレ演習 第三回全体指導
８月 ９日（土）　研究交流会・第一回公開講演会（台風のため中止）
９月 ８日（月）　第五回 専任会議
９月 18 日（木）　第 85 回 国立大学教育実践研究関連センター協議会
９月 26 日（金）～27 日（土）フレンドシップ事業 野外教育体験活動(屋島少年自然の家:公立小)

寄贈図書（2014/04～09）

岐阜大学教育学部　特別支援教育センター年報　第 21 号	岐阜大学教育学部附属特別支援教育センター
宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター　研究紀要　第 22 号　2014	宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター
富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要　教育実践研究	富山大学人間発達科学部 附属人間発達科学研究実践総合センター
平成 25（2013）年度　「子どもとふれあい体験」　実施報告書	富山大学人間発達科学部 附属人間発達科学研究実践総合センター
東京学芸大学　教育実践研究支援センター紀要　第 10 集　2014 年 3 月	東京学芸大学教育実践研究支援センター
平成 25 年度　独立行政法人教員研修センター 「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」採択事業　中学校区における 若手小・中学校教員間のピア・サポート型共同研修システムの構築　成果報告書	鹿児島大学教育学部　協力：鹿児島県教育委員会
群馬大学　教育実践研究　第 31 号　2014 年 3 月	群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター

中等教育研究紀要　第60号　2013	広島大学附属中・高等学校
中等教育研究開発年報　第27号　2013年度	広島大学附属中・高等学校　中等教育研究開発室
日本高等教育開発協会・ベネッセ教育総合研究所共同研究 大学生の主体的な学習を促すカリキュラムに関する調査報告書［ケーススタディ編］	ベネッセ教育総合研究所
山形大学　教職・教育実践研究　第9号　2014年3月	山形大学地域教育文化学部附属教職研究総合センター
群馬大学　教育実践年報　第3号　2013年	群馬県群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター
平成24年度　学位論文の要旨　―大学院教育学研究科（修士課程）―　2013年6月	山梨大学
愛知大学教職課程研究年報　第3号　2013年	愛知大学
平成25年度　修士論文要旨集　第19号	長崎大学大学院教育学研究科
教育実践開発研究センター研究紀要　第23号　2014.3	奈良教育大学　教育実践開発研究センター
静岡大学教育実践総合センター　紀要　No.22　2014	静岡大学教育学部附属教育実践総合センター
平成25年度文部科学省委託　教員の資質能力向上に係る先導的取組支援事業 教育委員会・大学の連携による「学校支援ボランティア」の指導・評価システムの構築 ―「教員初期スタンダード」をもとにした資質能力向上を目指して―　2014年3月	静岡大学教育学部
パイデイア　滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター紀要　Vol.22　2014	滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター
研究紀要　―第41号―　平成26年	広島県立教育センター
立命館教職教育研究　2014年3月創刊号	立命館大学教職教育推進機構
東京家政大学附属臨床相談センター　紀要　第十四集　2014年3月	東京家政大学附属臨床相談センター
熊本大学　教育実践研究　第31号　2014	熊本大学教育学部附属教育実践総合センター
2013（平成25）年度　熊本大学教育学部フレンドシップ事業　実施・成果報告書 2014（平成26）年3月	熊本大学教育学部附属教育実践総合センター
花園大学　心理カウンセリングセンター研究紀要　2014	花園大学　心理カウンセリングセンター
鼎　平成25年度「ちゃぶ台方式」教職研修部事業報告書　平成26年3月	山口大学教育学部
福井大学教育実践研究　―第38号―　2013	福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター
教育実践総合センター紀要　No.31　2013	大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター
教育実践総合センター　レポート　第33号　2013年12月	大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター
佐賀大学　教育実践研究　第30号（平成25年度）	佐賀大学文化教育学部附属教育実践総合センター
平成25年度　文部科学省委託事業「教員の資質能力向上に係る先導的取組支援事業」 教育委員会等との連携による教員の実践的資質能力向上システムの構築 短期大学から大学院まで体系化した教員養成カリキュラムの開発と教材資料の流通・提供 最終報告書　平成26年3月	岐阜女子大学
心理相談研究紀要　第12号　2013年度	神戸親和女子大学心理・教育相談室
立正大学臨床心理学研究　第12号　2013	立正大学心理臨床センター
広島文教女子大学　心理臨床研究　2013年第4号　通巻第21巻 広島文教女子大学心理教育相談センター・広島文教女子大学大学院人間科学研究科 臨床心理学コース合同紀要	広島文教女子大学心理教育相談センター
埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター　紀要　No.13　2014	埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター
教員養成カリキュラム開発研究センター　研究年報　vol.13　2014.3	東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター
東京学芸大学　教員養成カリキュラム開発研究センター　第14回シンポジウム記録集 これからの学校教育と教員養成カリキュラム 社会・学校改革の過渡期における教員養成を考える　　2013年12月7日（土）	東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター
三重大学教育学部附属教育実践総合センター　紀要　第34号　2014	三重大学教育学部附属教育実践総合センター
教育方法学研究　日本教育方法学紀要　第39巻　2013	日本教育方法学会
心理臨床事例研究　愛媛大学心理教育相談室紀要　第10号　2014年4月	愛媛大学教育学部附属教育実践総合センター 心理教育相談室
高知大学　教育実践研究　第28号　2014年3月	高知大学教育学部附属教育実践総合センター
鳥取大学　教育研究論集　第4号　2014年	鳥取大学　大学教育支援機構　教員養成センター
秋田大学教育文化学部　教育実践研究紀要　第36号　平成26年5月	秋田大学教育文化学部附属教育実践研究支援センター
愛媛大学教育実践総合センター　紀要　No.32　2014	愛媛大学教育学部附属教育実践総合センター
札幌学院大学心理臨床センター紀要　第14号　2014年7月	札幌学院大学倫理臨床センター
宇都宮大学教育学部　教育実践総合センター紀要　第37号　2014年7月1日	宇都宮大学教育学部附属教育実践総合センター
学校教育実践学研究　第20巻　2014	広島大学大学院教育学研究科 附属教育実践総合センター
平成25年度広島大学教育学部フレンドシップ事業　ゆかいな土曜日　実施報告書 平成26年3月	広島大学教育学部フレンドシップ事業運営委員会
平成25年度新潟大学教育学部「フレンドシップ事業」報告書 1年次生を対象とする教育実習カリキュラムの開発研究(第15年次)　平成26(2014)年	新潟大学教育学部教員養成フレンドシップ事業推進室
平成25年度新潟大学教育学部「フレンドシップ実習」報告書 社会教育施設・団体と連携する「体験的カリキュラム」の開発研究 ―第17年次研究―　2014（平成26）年3月	新潟大学教育学部「フレンドシップ実習」研究会
平成25年度新潟大学教育学部「フレンドシップ事業」 大学院教育における実践的カリキュラムの開発（第9年次） 平成25年度「学校インターンシップ」実施報告書　2014年3月	新潟大学教育学部教員養成フレンドシップ事業推進室 新潟大学大学院教育学研究科 学校インターンシップ委員会
平成25年度新潟大学教育学部「フレンドシップ事業」実施報告書 4年次生を主要な対象とする教育実習カリキュラムの開発研究 「研究教育実習」の多用な展開（X）　平成26年3月	新潟大学教育学部教員養成フレンドシップ事業推進室
平成25年度新潟大学教育学部「フレンドシップ事業」実施報告書　新潟市教育委員会との連携協力による「学習支援ボランティア」派遣事業の実施（第11年次） 学生の学校支援を組み込んだ教員養成カリキュラムの開発に向けて　平成26年7月	新潟大学教育学部教員養成フレンドシップ事業推進室
平成25年度新潟大学教育学部「フレンドシップ事業」報告書　離島をフィールドとする教育実習カリキュラム　「佐渡実習」の開発研究（第1年次）　2014年3月	新潟大学教育学部教員養成フレンドシップ事業推進室
ルーテル学院大学　臨床心理相談センター紀要　2014　Vol.7	ルーテル学院大学　臨床心理相談センター
研究成果報告書サマリー集（平成25年度終了課程）　平成26年8月	独立行政法人　国立特別支援教育総合研究所

【センターからのおしらせ】

本センターでは、教員養成において ICT 活用指導力の基礎を培うため、また附属学校園における ICT を活用した授業実践が積極的に展開されることを願い、タブレット PC(iPad)を 21 台整備し、平成 26 年５月より、本学教育学部教員の授業向け、ならびに附属学校園の授業実践向けに貸出を始めました。併せて、屋外や無線 LAN が整備されていない場所でもご活用いただけるよう、モバイル Wi-Fi ルーターも２台整備し、貸出しています。またご要望に応じ、授業での iPad 活用サポートや授業開発のお手伝いも行っています。

もう一歩 未来の教育実践に、挑戦してみませんか。

（詳細は、実践センター事務室までお尋ねください。）

＜活用事例ミニレポート＞

本年７～９月、附属高松中学校の教科学習ならびに未来志向科の授業においてご活用いただきました。生徒たちの積極的で柔軟な活用の姿が随所に現れていました。

タブレットPC (iPad)

皆様の授業でも活用できます。

※貸出対象：本学教育学部教員・附属学校園教員

教育実践総合研究（第 30 号）原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第 30 号は、**11 月 28 日（金）**原稿受付締切です。
以下投稿要領をご参照の上、奮ってご投稿ください。

香川大学教育実践総合研究 投稿要領

１（投稿の要領）

香川大学教育実践総合研究（以下「教育実践総合研究」という。）への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。

２（投稿の内容）

教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料（研究ノート、研究動向の紹介など）及び香川大学教育学部附属教育実践総合センターの活動報告などを掲載する。

３（投稿者）

教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議（以下、「会議」という。）が特に依頼した者とする。

４（投稿原稿の提出方法）

投稿原稿は、完成原稿とし、原則としてワープロで作成し、ワープロ打ち出し原稿２部と、原稿を保存したフロッピーディスク等を会議に提出する。

５（投稿原稿の長さ）

投稿原稿の長さは、刷り上がり１４頁（１頁は２１字×４２行×２段）以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。

６（刷り上がり１頁目の形式）

刷り上がり１頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属（所在地）、和文要旨（200 字）及びキーワード（５語）を含むものとする。

７（投稿原稿の取り扱い）

投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。査読者については、会議において決定する。

（１）採　録　　（２）条件つき採録　　（３）返　戻

８（校　正）

校正は原則として３校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附 則　本要領は、平成１６年４月１日から適用する。
附 則　本要領は、平成１７年１２月１４日から施行し、平成１７年１１月９日から適用する。
附 則　本要領は、平成１９年４月１日から施行する。

香川大学教育学部附属教育実践総合センターニュース
（No. ４０）

発行日 平成２６年　９月３０日
編集発行 香川大学教育学部附属教育実践総合センター　**代表者** 七條 正典
URL　http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/　E-mail jcen@ed.kagawa-u.ac.jp
〒760-8522　高松市幸町１－１　Tel. 087-832-1683　Fax. 087-832-1689